
コンビニから始まる妙な友情？

銀実 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニから始まる妙な友情？

【Nコード】

N7998E

【作者名】

銀実 空

【あらすじ】

深夜のコンビニは妙な客が多い。つてのは、一年もバイトしてるから、そんなものは知っていた。でもまさか、喧嘩口調で逆ナン（もどき）をされるとは思っても見なかった。恋愛色が強い、ラブコメ小説です。コンビニから始まった、友情とも言えない微妙な関係をおもしろおかしく、ほのぼのと書いていく予定です。超！不定期更新ですが、必ず完結させますので、暖かく見守って下さい……

第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのように始まりました（前書き）

初連載ですが、暖かく見守ってくださいると嬉しいです^^是非、感想等お願いしますm(_____)m

第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのように始まりました

「1860円になります。お箸はお付けしますか？」

「ああ。頼む」

「いくつ、お付けしますか？」

「1つ」

「かしこまりました」

今日も深夜のコンビニで、俺はおっさん相手に、営業スマイルをかましている。

俺の名前は寿拓也。^{コトフキ}タクナリと読む。

今年で20歳になるのだが、仕事というのもこのコンビニのアルバイトのみ。俗に言うフリーターである。しかし、ニートとも違う。なぜなら俺はきちんと、『働く意欲』があるからだ。

「いらつしゃいませ」

店内に入ってきた客に、また笑顔を向ける。入ってきたのは俺と同じぐらいの女性だ。

深夜のコンビニとは、なかなかおもしろいものだ。最初は給料の良さだけに魅力を引かれたものだが、今は違うところに魅力を感じる。

それは、客だ。

深夜というのもあり、すごく個性的な客をよく目にする。例えば、18禁雑誌をこっそり買って帰る奴や、ものすごい酒臭い奴が10本くらいビールを買っていく奴。ああ　　そうそう。ものすごい真面目そうな男の人が、ちょっと照れくさそうに女性の下着セットを買って帰ったときは、さすがに驚いた。

コッソ

さっき入ってきた客が、カウンターの上にカゴを置いたのでハッと我に返った。

「いらっしやいませ」

そう言いながら客の方を見た。

肩ぐらいの髪をサラサラと揺らして、サングラスをかけている。タンクトップにショールパンというラフな格好は、その人のスタイルの良さを引き立てていた。

その女性は、レジの近くにある新製品のお菓子売場の方を見ると、そこにあるお菓子を手に取り、サングラスを外した。

すげえ美人　　。

俺は思わず、動かした手を止めその女性の横顔を、まじまじと見つめてしまった。

否 見とれて、いた。

大きくくりつとした目は、存在感ばっちりな二重。スウツと通った鼻に、つやつやのグロスを唇につけていて、それだけで色っぽさが倍增する。

メイクは濃すぎない、ナチュラルメイクだったのだが、元の顔が整っているせいか、それも気にならないくらいだった。

カゴに手をかけたまま呆然としていて、俺の視線に気づいたのか、彼女がこちらを向いて言った。

「あ？何見てんだよ。手を動かせ。手を！」

……………。

はい？

な、何か今、幻聴が聞こえたような……

「だから！なにボサツとしてんだよ。ちゃんと仕事しろよ」

その目の前にいる客は、言い終わったあとまるでバカにするかのようにハッと笑った。

え…………？うそあ？

さっきの台詞、この人が言ったの……？だ、だって顔に似合わず、ものっそい口悪い

そんな俺の混乱を知ってか知らずか、まるで田舎のヤンキーの様に立ち、（ショーパンのポケットに、両手の親指だけ突っ込み、体

を斜めにして、こちらに傾けてる状態）目を細めて俺の胸元を見ている。いや、正確にはコンビニの制服の胸ポケットにある、ネームプレートを見ていた。

「オイ、おまえの名字、 なんて読むんだ？コト、ブキで合ってるのか？」

「……は？あ、ああ。まあ。」

「おまえ…新人だろ？」

「いえ…違つと、思いま…す？」

「なんで疑問系なんだよ」

言い終わると、またバカにしたようなハツて笑い方をする。

この人は、今コレがマイブームなんだろうか？

それとも…癖？

「いや…新人かベテランかどうかっていうのは、自分で決めるもんじゃないと思うんで…」

「ほお。新人のくせに言うじゃねえか」

すると今度は今までとは違つ、まるでニヤリという効果音が付きそうな笑い方をした。

ってゆーか、俺は新人と見なされたのか…。このバイト初めて一年とちよつと経つぞ…？さっきはかつこいいこと言つたが、ぶつちやけ自分では、新人では無い気がするんだが…。

「ホラ、口だけじゃなく、手も動かせや」

いや…喋らせたのあんただろう！

とツツコミたくなつたが、従業員という立場の俺がそんな文句も言えるはずが無く、申し訳ありませんでしたと謝ってレジを続けるしかないのだつた。

「合計で626円になります」

「ムニム！ムニムがあゝ。なんかいやらしくね？6262円だつたら、ムニムニだぜ？」

オマエはどこ小学生だ！そんなくだらないことで、ニヤニヤするな！しかもいい歳こいた女性がゝだぜって言葉、使っちゃいけません！！

と、心のなかでその人に、めちゃくちゃツツコんだ。目一杯ツツコんだ。

ちなみに、この時点でわかった人もいるだろうが、俺をボケかツツコミで表すなら、断然ツツコミだ。だからこの立ち振る舞いといい、発言といい、ツツコミ所が満載な彼女は俺にとって、体に良くない。

彼女は、合計の値段を聞いてから、お釣りを渡すまですつとムニムかゝ。2が一個足りねえんだよなあと、ブツブツ言っていた。

俺が品物を袋に入れて、彼女に渡すと向こうは俺をじーっと見てきた。

「な、なに

」

「おまえってこの時間帯、いつもいるの？」

なにか？と、質問しようとしたら向こうも質問をしてきて、少しびっくりした。

質問の内容は、俺にとって？？？な内容だったが、一応俺は真剣に答えることにした。

「そう…ですね。ほとんどがこの時間ですかね…。時間があるときは、昼にシフト入れるときもあります…」

「ふん。まあ、私が暇なときは、また来てやるよ」

「……………はい？」

「まあ、期待して待つてな。コトブキさん」

まるで説得するかのように、俺の肩を叩いては、満足そうにクツクツと笑って帰っていった。

この日から、俺と彼女のコンビニを通した、奇妙な付き合いが始まるのだった。

第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのように始まりました（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます^^誤字・脱字等あつたら報告を、他にも感想・評価などしてくれるとありがたいですm――m

第2話・自己紹介はすぐにしましょう（前書き）

第2話突入です^^感想・評価おねがいします。

第2話・自己紹介はすぐにしましょう

「ヨオ。コトブキさん。また会ったな！」

「またあなたですか。なに偶然を装ったようなフリをして…」

「ノリ悪いな。ブキさんは」

「勝手に気持ち悪いあだ名、付けないでください！！それに、なにが暇な時来る。ですか！あなた毎晩来てますよ。毎日暇ってことじゃないですか」

「それを言われちゃうとなんとも言えねえよ」

そう言いながら、ガハハと笑う。

女性らしくない笑いだなーと、つくづく思った。

元は綺麗なんだから、にっこりと笑ってれば、絶対世の中の男性殆どを虜にできると思う。

ちなみに今の彼女の格好は、レジのカウンターに両肘を付き、前のめりになって俺と会話している。

他に客がいらないからいいものの、俺たち以外の誰かいたら、迷惑行為以外の何者でもない。

ちなみに店員は俺以外に1人いるのだが…。この店員がまたどうしようもない。ズーっと奥に引きこもり寝ているのだ。

この人を給料泥棒と言わずに、誰を言うのだろうか？

謎の女が俺に声をかけてから、1週間が経った。

彼女はあの日から毎晩俺のところに来て、他愛もない話をして帰る。

話の内容なんて…大したこと無いものばかり。

まあ、最初の2日間は、ずーっと彼女の質問攻撃だったのだが。

あれはすごかった。思い出しただけでも、嫌な汗をかく。なんか…転校初日から、女子に質問責めにあってる男子の気持ちがかつたきがした。

実のところを言うと、最初この人の相手をするのが、ものすごくイヤだった。『仕事に集中したい』とか『あんたと話してもつまらない』とか、いろいろ言いたかったんだけど、集中するほどの客は来ないし、意外と彼女との会話はおもしろくて、断る理由をすべて無くしてしまった。

この1週間、彼女と話してみてもう少しだけ、彼女の情報が増えたので、あげてみよう。

どうやら年齢は俺より上らしいが、細かいことは教えてくれなかった。

それと1人暮らしをしているらしい。しかも、俺の家から結構近いと言うこともわかった。

.....。

1週間かけてこれだけの情報って、どれだけこの人は謎に包まれているんだ…。

だって彼女、自分のこと話してくれないんだもん！
と心の中でボケても、誰も突っ込んでくれるはずもなく、虚しい気分になるだけだった。

まあ、初めて会ったときよりか、彼女に突っ込みが出来るようになったのは、幾分か前進したと思う。

「なあなあ。コトブキさんも1人暮らしなのか？」

「あれ…？言ってますでしたっけ？」

「ひ、ひどい！！私を誰と勘違いしているのよ！！」

「勘違いとかじゃなくて、あれだけすごい数の質問を一边に聞かれたら、言ったことも忘れますよ」

「はいはい、わかりましたよー。どうせ私が悪いんですー」

そう言う彼女独特のハツて笑い方をする。

そうそう、ここ1週間でわかったことと言えばもう1つ。彼女は思った以上に、口が悪いと言うこと。

その行動や喋り方はまさに『男』と同じ。

なんてことを思い出していると、ほら！質問の答え！と言いながら、カウンターをバシバシ叩いて、俺の答えを急かした。

「ああ…まあ。1人暮らしですけど…。てゆーか、俺のことなんで『コトブキさん』なんですか？あなたの方が年上なんだから、下の名前で、呼び捨てでいいですよ」

彼女は手を顎に添えて、うーんと考える仕草をしたあと

「それもそうだよなあ。じゃあおまえのことは呼び捨てにするわ！………そっぴやオマエ、名前なんつーの？」

と言った。

「あれ？これも、言ってませんでしたっけ？」

「ひ、ひど

」

「その流れはもういいです」

そう言いながら彼女の方を見ると、唇をとがらせて、チエツなんて言いそうな顔をしていた。

「俺の名前は、拓也タクナリですよ。タクヤと書いて、タクナリと読むんです」

「ふーん。タクナリ…ね。わかった！オマエはこれから成金だ！」

「なんでそうなるんですか！？………大体、予想は付いてるけど」

後半は誰にも聞こえないように、小さな声でボソツと呟いた。

「タクナリのナリを取って、成金!!」

「やっぱりか…」

俺は溜息を付くしかなかった。つーか今この場でこれ以上の、最適な行動があるなら、是非伝授してもらいたいものだ。

「せめて…名前っばいものにしてもらえませんか？」

「じゃあ……クリリン？」

俺はここ最近で最大の溜息をつく。

「はあ。もう……何でもいいです。成金だろうが、クリリンだろうが、ベジータだろうが、好きに呼んでください」 そう言うと、彼女は本日2回目のガハハ笑いをした。

「嘘だよ、嘘! もうゝそんなに拗ねないで。タクナリくん…?」

クン付けも、この歳でどうかと思うけど…。なんてことを考えていると、俺の顔を両手で挟み、グイッとこちらに向けた。

俺と彼女の顔の間、約5センチ。

「お姉さんが悪かったら、そんなに怒らないで…?」

ものすごく甘い声で、そう言ってきた。

多分彼女はわかっていないだろう。めちゃくちゃ綺麗な女の人の顔が目の前にあって、そんな甘い声を出されたら、世の中の男は我慢ができないということ。

俺だって今、すごくギリギリのところで戦っている。

5分以上経ったかのように思えた。

実際にはそんなに経っていないだろう。多分15秒も経っていない一瞬の間。でも、彼女の顔の近さとか、顔にかかる息のいやらしさとか、ほのかに香る甘い香りだとか……すべてが俺の感覚を狂わしていた。

ダメかも俺　このままだったら………何かしちまう。

俺だって男だ。こんな状況で理性が保てるわけ無いのだが、俺のプライドが許せない。

「あ、…あの」

この状況を何とかしようと、俺は必死に声を出した。

「ということだ！ タクナリには、私のことも呼び捨てでいい！ という、権利を与えようっ」

『うつ』のところで俺の両頬に置いてあった手を、パシッと叩いた。

「いつて！！なんかものすごく、いい音したんですけど」

「がはははっ！気にしない」

なんて 平然を装っているけど、ホントのところは顔は真っ赤で、心臓バクバク。頭の中ではあの甘い声が、なんどもリピートされていた。

なんだか、この人の考えていることがいまいちわからない。

叩かれた頬をさすりながら、彼女をちらつと見ると、あふれんばかりの期待に満ちた顔をしていた。

「さあほらっ！私のこと呼んじやいなよ！！今ならお姉さんって付けてもいいぜ！さあ、ホーレホーレッ」

ホーレホーレって…どこの変態おやじですか。と苦笑いしながら突っ込むと、彼女は真顔で『人間誰しも、心の中に変態おやじが住み着いてるものなのだ』とさり気なく、ホラー映画にもなるようなことを言ってきた。

「それでは…」

と言うと、コホンと咳払いをして、彼女の名前を言おうとした。

「あ……あれ？」

「ん？どした？」

彼女の名前が言えない。なぜか言えない。口からでてこないのだ。

それもその筈だ。

「俺…あなたの名前、聞いてましたっけ？」

……。

……。

……。

「あ」

そのコンビニには、しばらく気まぐさが流れたという……。

第2話・自己紹介はすぐにしましょう（後書き）

読んでくださってありがとうございます^^評価・感想は作者にとつてかなりの励みになります。是非よろしく願いますm（|
|）m 次回、タクナリのルックス、謎の女の名前、自己紹介をしてないと気づいてからのその後が明らかに！！

第3話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

1（前書き）

評価・感想を書いてくれた方。メッセージを送ってくれた方。本当にありがとうございます！！ 注：今回は途中で視点が変わりますのでご注意ください…

第3話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

1

ジリジリ焼け付くような暑さ。蝉がここぞとばかりにミンミン鳴いている。

「……うるせえ」

そんな蝉に嫌気がさしタクナリは起きた。

「うつわ…汗でびっしょりじゃねえか」

自然と漏れる独り言。

こんな暑い日にクーラーも付けないで寝てりゃ、そうなるか…。
と1人で納得し、時計を見る。

2時か…。結構寝たな。

うーん、と伸びをしてベッドから降りると、とりあえずシャワーを浴びに行こうと考えた。

俺が家に帰ってからするのは、とりあえず寝る。

仕事しているときはそうでもないのだが、帰ってくるのが早朝ともあり、家に帰ると倒れ込むようにベッドにダイブするのだ。

「あぢー」

寂しくなると独り言が増えるんだな！。

なんて思いながら服を脱ぐ。

蛇口をひねってお湯を出す。まあ実際、お湯ともいえないくらい

のぬるま湯なんだけど。

「うつひゃゝ気持ちいい！」

ほぼ水とも言えるくらいの気持ちいいぬるま湯が、体についたベタベタな汗を流していく。

適当に体を洗って頭を洗い、脱衣所に行って適当に服を着る。頭をバスタオルでかき回しながら、今月分の勤務表を見る。

「確か今日は　　っと、やっぱりそうだ」

そう今日は、久しぶりの休み。

「おっしー！」

思わず決めたガッツポーズが、思った以上にオーバーで、少し恥ずかしくなりキョロキョロしてしまう。

「あ……」

カウキタレイカ
川北麗華。

ふと彼女の名前を思い出した。

彼女は今日俺が休みだと知っているのだろうか……？
知らない……よなあ。

そんなことを考えていると、昨日の（今日とも言つ）あの子の川北麗華の様子を思い出した。

コンビニには、なんとも微妙な気まずい空気が流れてた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ぶっ」

静けさが重なる中、俺の笑い声が沈黙が破った。

「な、なに笑ってんだよ」

「だっ…だって…一番張り切ってたのに…ククッ…名前…言ってないって…プッ……ば、馬鹿」

「るせえ！おまつ、それ言うな！なんか…恥ずかしいじゃねえか」

「ぶくくくく、馬鹿だ。ホントの馬鹿だ」

「笑うなー！…！…！」

「ククッ……………」

ダメだ…思いだすだけで、また笑える。

あの人のあんな必死な顔始めて見た。真っ赤な顔であたふたしてて、それがまた俺の笑いを誘っていた。

っと、思い出に浸ってる場合じゃない。

「うーん……どうしよう」

多分彼女はいつもと同じように、コンビニに来るだろう。伝えに行くとしても、彼女との連絡方法が全くない。

あつ！でも確か彼女の家……。

「ま、大丈夫か」

幸いあのコンビニは、俺の家のすぐ近くだったりする。歩いて5分するかどうかという距離だ。

この前あの人が言っていた、『彼女の家が、俺の家と近い』と言う情報が正しければ、俺がいないと分かればすぐ帰るだろう。

ってことで…。

「今日は久しぶりにのんびり過ごしますかつ」

誰に言うわけでもなく、そう言った俺は伸びをしながら、後ろのソファにボフツと倒れ込むのだった。

月明かりに照らされた手書きの地図を見て、私は暗闇を歩く。

タクナリ驚くだろうな！。

今から会いに行く男の、驚く顔を想像するとつい笑いがこみ上げてしまう。

私の名前は、川北麗華。

時刻は午前3時。違う言い方をすれば、『深夜』の3時だ。

私は今から、とあることがきっかけで知り合った男に会いに行く。

その名も寿タクナリ。コンビニでバイトしているところを、私から絡んだことから始まった。

なぜ私がタクナリの家に行くのか。事の発端は、ほんの数10分前だった。

「ええ！？タクナリいねえのかよ！」

「はっはい。寿さんは今日休みですけど……」

「まじかよ……」

驚いた。いつものようにコンビニに行くと、タクナリの姿はなく、代わりに清楚なイメージを持った女性店員がいた。

「あ、あの…寿さんとはどういう……」

「うえっ!？」

そんなことを聞かれるなんて思っても見なかったので、私は思わずすすっとんきょんな声が出た。

彼女が言いたいことはわかった。とにかく『さっきから妙に親しげだけど、寿さんとはどんな関係なんじゃない!』と言っことだらう。

よく見ると彼女はまるで、私を威嚇するかのように睨み付けている。

「ほお〜ん」

「なんですかっ!？」

「いや別に〜」

そういうことか…。こいつ…タクナリに惚れてるな？

私は思わず耐えきれなくなって、クツクツと笑ってしまった。

「っ!?! バカにしてるんですか!?!」

彼女の声がコンビニに響き渡った。

おおっ。こわっ!

予想外の反応に、呆然としていると店員さんは、我に返ったようにハッとした。

この人はアレだね。興奮すると前が見えなくなるタイプだね。

1人でうんうん、と納得していると店員さんは焦ったように声をかけてきた。

「と、とにかくっ!!!!どんな関係かも分からないあなたに、寿さんの詳しいことは」

「アレ、あなた」

うお？

女の店員さんの声にかぶって、聞いたこと無い低い声が聞こえた。

あなた…確か…。

「いつも寝てる店員っ!!!!」

「そっでーす」

私がちよつと興奮して言うと、無表情でピースを作って出てきた。

「ちよつ……新田さんっ！否定してくださいよ」

「だってホントのことだもん」

また無表情。どうやらこの人は、感情を表に出さないらしい。

ニツタ…かあ。へえ…この人ニツタって言うんだ。そういえばタクナリもそんなこと言ってた気がするな…。

「そう言えば新田さん。このお客様のこと、知ってるみたいでしたけど…」

「ああ…なんか、寿が言うには、親戚らしいぞ」

……………？

親、戚？

「そうなんですかつ！？」

女性店員が、もの凄く怖い顔で聞いてきた。

ああ。そうだった。すっかり忘れてた。

実は私とタクナリで、いつもの様に会話をしていると、レジの奥にある扉からニツタが出てきたときがあった。

そのとき、ニツタが私たちの関係を聞き、苦し紛れに出た答えが、そう『親戚』。

彼になぜ嘘をついたのか聞いたら、『とつさに…』と言っていたのを覚えてる。

まあ、そういうことなら仕方ない。

私は心の中でニヤツと笑うと、小さく深呼吸をする。
そして、店員2人に軽く頭を下げた。

「先ほどは失礼いたしました。ここにタクナリがいるものと勘違いをしていたので、少々取り乱してしまいました。」

「はあ!？」

私の態度が急変したからであろう。女性店員が女らしくない顔で言ってきた。

「さきほど、ニツタさんが仰った通り、私^{わたくし}コトブキタクナリの母方の従姉妹、川北麗華と申します。」

そう言って私は、にっこりと微笑む。

よし!完璧!

「実は最近、ここが仕事場だと言うのを知りながら、タクナリに会うためにこのコンビニに足を運ばせていただきました」

「は、はあ……」

ニツタの方は表情を1つも変えなかったが、この際女さえ騙せばいいと思った。

「といたしますのも、ここ最近、コトブキ家を含んだ私たちの家系で、少しトラブルが起きてしましまして……。そのことでタクナリに話があったのですが、あるうことか彼の携帯電話の番号も知っておらず……。迷惑とは分かっていたのですがここをお借りして、話させていただきました。……ごめんなさい」

こういう場合は、泣いちゃだめ。オーバーになると嘘くさくなる

から、シュン…と落ち込む程度が、いい。

「いえっそんな！私も知らなかったのが悪いんです。」

ほーら、ノってきた。

「いえっ！？あなたは謝るようなことしてません！なので…謝らないでください。……………それで、1つお願いがあるんですが…」

「なんでしよう…？」

「実は…今すぐ彼に、伝えなければならぬことがあるのです。夜中というのは分かっているのですが…。彼の…電話番号が何か、教えていただけないでしょうか…？」

そう言うとは、申し訳なさを含んだ微笑みを見せた。

人間なんて単純で、ちょっと詳しいこと話して、いい子を演じれば簡単なのだ。

数々の修羅場をくぐってきた私に、怖いものなんてないっ！

でも…まさか住所を教えてくださいとは、思ってもみなかった。

しかも教えてくれたのはまさかのニッタ。

ニッタが言うには『今なら寝ているかもしれないから、直接家に言った方が早い』と言うことらしい。

ニッタは私の演技に、気づいてたと思うのに…。うん、あいつはあ

の女と違って話が分かりそうだ。

なんて考えながら歩いていると、目的地の建物を見つけた。

「ほー。あいつ、フリーターの分際でマンションに住んでるのかよ……」

皮肉を含んだ独り言を漏らしながら、タクナリの部屋に向かって歩く。

タクナリの部屋は1階らしく、そんなに時間もかからずに着いた。

ピンポン

インターホンを鳴らしてみるが、反応がない。

もう1度。

やはり反応がない。……てことは、寝てんのか。

「それ、必殺技！呼鈴百連発ヨビリンヒャクレンバツウウー！！」

一応夜中だから、それなりの小さな声で言った後、かなりの速さでインターホンを鳴らした。

お？なんか中から音が聞こえたぞ。

私はインターホンを押すのをやめ、扉の向こう側の音に集中した。

ガタツガタガタツ、ドンドンドンドン！

音が大きくなってるから、こっちに向かって歩いてるんだろうな。
ん？音が止んだ。

と同時に扉が開いたので、私はびつくりして1歩下がる。

「うるせえ…。静かに寝かせろよ。なんであんなに鳴らしてんだよ。
必殺技かってー…の？」

「いよつー!!」

なんだか物凄く不機嫌そうだけど気にしない。私は扉を半分まで
開け、立ち尽くしている彼に満面の笑みで挨拶を

ボタンッ

閉められた……？

目の前の彼…正確には、扉の向こう側にいる彼は、私の挨拶に返
事もせずに勢いよく扉を閉めた。

さすがに…この時間に家に行くのは迷惑すぎたか…。うーん。い
くらタクナリでも怒ったかな…。

なんて、滅多に感じない罪悪感を感じていると、また扉が開いた。

「なに…やってんすか…」

ものすごくリアルな反応をしている彼が、どうしようもなくおか

しくて私はつい笑ってしまふ。

「いや…笑ってないで。答えてくださいよ」

「…っ。ああ、わりいわりい。とりえず上がらしてもらっわ」

「えっ！ちよっ！！」

タクナリの抵抗を無視して部屋に上がろうと思ったら、扉の前でタクナリが『通せんぼ』した。

こうゆうとき、やはり彼は男なんだなあ。とつくづく思う。

彼を押しつけて部屋に入ろうとしてもビクともしないし、私のすぐ目の前に立つ彼は、かなりの迫力だった。

いつもはカウンター越しだからわからなかったが、こう見るとかなりの長身。

「ちよっと…通らせるよ。外蒸し暑いんだぞ」

「俺の部屋もクーラー点けてないから、外とあまり変わりません。

…なんでここにいますか？」

「なんでクーラーねえんだよ。この貧乏人！！」

「貧乏人は否定しませんが、クーラーはちゃんとあります。点けてないだけです。どうしてこんな夜中に、いますか？」

「あるなら点けるお！！クーラーはオブジェじゃねーんだぞ！使用方間違えてんじゃ…！！いひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

気づけばタクナリは私の頬を両手で掴み、引っ張っていた。

ってゆーか、タクナリものすごい笑ってんだけど……逆に怖いんだけど……！

「俺の質問に、答えてください」

「はい……答えるので、手をはじゅして、ください」

私が涙目になりながら訴えたら、彼は呆れたように溜息を付きながら、手を離してくれた。

「で？どうしたんですか？」

「そのすきに、とりやつ！」

「いい加減にしろー！！！」

タクナリの罵声が、深夜の住宅街に広がった。

第3話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

1（後書き）

意外と長くなったので、さりげなく次回に続いたりします。ほんと
：行き当たりばったりで書いているので^^； あ！感想、評価お
待ちしてます^^ メッセージではお返事できませんが、評価欄（
？）のところに書いてくれれば、ほぼ100%の確率で返信します
ので…。ではでは！！

第4話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

2（前書き）

感想・評価、並びに誤字・脱字等の報告お待ちしています^^

第4話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

2

私って誉められて伸びるタイプなのかなー、と思った。

いや、それとこれとは関係ないのだろうけど、おもっいきり怒られるより、優しく怒られたほうが…なんつーか、結構『来る』。

「うーん、まあ俺が何も言わなかったのは、悪いと思ってます」

ああ！もうそうゆうこと言われると、さらに罪悪感がっ！…だったから、頭を下げるなあ！

あの後タクナリの部屋に無理やり入ったのはいいものの、入って5秒もしないうちに捕まり、私は全部自白した。それを聞いたタクナリはすぐに説教モードに入ったのだ。

その怒り方は本当に反則だと思う。ほぼ『説得』に近いものなのだ。

「あなたは女性ですから、この時間にこの辺りをうろろろするのは大変危険なんです」

「はい。…ごめんなさい」

私がそう言うと彼は小さく、『ふう。』と息を吐き、

「わかってくれたならいいですよ。では、この話はおわりにしまし
よう」

と言った。

「え…？」

私は意味が分からず、聞き返すとタクナリはにっこり笑って、私に言う。

「いつまでもグチグチ言われるのは気分が悪いでしょう。もちろん俺も嫌ですし…。だからきちんと区切りをつければ、気持ちの切り替えもしやすいでしょう？」

なんつーか、タクナリはすごいと思った。

「おまえ…良い父親になるよ…」

「はあ？」

だって、本当に思った。だから私は素直な感想を言った。

タクナリは意味がわかってなかったらしく、頭の上にたくさんの『？』をつけていた。

「そっいえば…なんでタクナリ、上半身裸なんだ？」

さっきまではあまり気にしてなかったけど、落ち着いたらタクナリの格好が気になった。

彼はジャージのハーフパンツを履き、なぜか上半身に何も着ていなかった。

こうして見ると、『男の人の体』って感じた。

「え？…ああ、さっきも言ったと思いますけど、俺クーラー点けないうで寝るんですよ。だからいつも寝るときになると暑さ対策で脱ぐ

んです」

「ふうん。私はてつきり、それで誘惑をしているのかと…」

「そんなわけないでしょ。それに誘惑できるほど見た目よくないですよ」

そう言うときタクナリは、ハハッと笑う。

うーん。自覚が無いだけなのか、社交辞令で言ったのかは分からないけど、かなり美形のレベルに入ると思っただけだなあ。

背だつて高いし、顔は整ってるし、乙女心分かってるっつーか…。実際に、バイト先の子がタクナリのこと好きっぽかったし…。

ま、こいつは気づいちゃいねえんだろうな。天然っぽいもん。

「それで…？この後どうするんですか？」

タクナリはキッチンにある、冷蔵庫の中の牛乳パックを取り出しながら私に聞いた。

私も喉沸いたからあとで貰おう。

そうそう。後、タクナリの家は意外と片付いていた。

まあ、部屋の造りは居間にキッチン。それと、襖で区切られていて分からないが、多分寝室だろう。あとはトイレに風呂…と至って普通のマンションだったが、部屋そのものはものすごく綺麗に片付けられていて驚いた。

ちなみに今私がいるところは、居間だ。2人がけのソファがあり、その向かい側に机、その奥にテレビ。と、並べてある。

「んああ。泊まらせてもらっわ」

「ぶっ!?!」

「汚っ!なに吐いてんだよ…」

彼は飲んでいた牛乳を、おもいつきり吹いた。

「だって…なに言ってるかわかってんすか？」

「ああ。わかってるよ。私はそこまで馬鹿じゃない」

「はあ…。家、近いんじゃないんですか？」

「んゝ確かに近いけど、こんな夜中に外を歩くより、タクナリの家
に泊まったほうがよっぽど安全だと思うんだけど？」

「あなた…最初からそのつもりだったでしょう？」

「さあね?でも不思議なことに、ここにさっきコンビニで買った下
着セツトがあるんだよねあゝ」

「バリバリ泊まるきじゃないですか…」

タクナリは溜息をしながら呟く。

まあ、否定はしないけどね。

「それと、私は納得がいてないことがある!-!」

私は思いだしたように、唐突にタクナリに講義に出た。
実際、本当に今思い出したんだけど。

「なんですか？」

「せっかく昨日、私を呼び捨てにしている。と言う権利を与えたのに、さっきから名前で呼んでいないじゃないか……！」

そうなのだ。今思えば今日会ってから、一度も名前を呼ばれていない。いや、呼んでくれない。

無意識なんだろうけど、ちゃんと言っておかなきゃ！

「別に……そんなこと」

「そんなこととはなんだー！！人間は皆、平等でなくてはならない。それなのにどうして私だけ名前で呼んでいるんだ？おかしいと思わないか……！」

「わかりましたよ……麗華、さん？」

「さんはいらない……それに、なんで敬語なんだ？別にタメ口でもいいのに……」

「それはダメです」

「なんでだよ」

「俺は例えどんな人でも、年上の人に敬意を表すようにしてるんです」

「なんだそれ。誰の教えだ？」

「俺の母ですよ」

そう言った彼は、どこか悪戯好きな子供のような、口を両端につり上げて笑った。

初めて…そんな顔を見せた彼に、ドキッとしたのは私だけの秘密だ。

「あ…そうそう。コレ、どうぞ」

思い出したようにタクナリが言うと、私の元へ白い物をポフッと投げてきた。

「んあ？バスタオル…？なんだこれ」

「この時期、いくら夜でも外歩いたら汗、かきませんでした？だからシャワーでも浴びてサッパリしたらどうです？」

「おお！おまえ、なかなか良いこと言うじゃねえか」

そんな言葉を聞くと、彼はクスツと笑った。

「んー…おつきいかな…」

なんて呟きながら、タクナリは襖の向こうにある、洋服ダンスをあさっている。

ちなみに襖の向こうは、私の予想通り寝室だった。

私はそんなタクナリの行動を、バスタオルを抱えたまま遠目に見ていた。

「すみません。寝間着になりそうなの、これくらいしかなくて…」

そう言いながら、ジャージとＴシャツを持ってリビングに戻ってくる。

「いんや、なんでもいいです。この際全裸でも平気です」

「いやいやいや。それはやめて下さい！！」

「がははは！嘘だよ、嘘」

そう言って笑うと、タクナリは赤くなりながら、綺麗に畳まれた洋服を渡してきた。

「ったくもう…：そうゆう冗談はよしてください。あなたが言つと、冗談に聞こえないんですよ」

「んだと、コラ。そんなに私が常識無いように見えるか。そんなに私がエロテロリストに見えるのか！！」

「見えます。それもかなりリアルに」

「なんでだよ、コラ。私はエロテロリストなんかじゃねーよ。私は変態であつてエロテロリストじゃない！私は変態なんだ！エロテロリストなんかじゃ」

「どっちも変わんねーよ！しかもあんた変態なんですか！？」

「おう！泣く子も黙る、隠れ変態だ」

「そんな『隠れ』聞いたこもないですよ！全然レア感、感じないんですけど」

「がははは！見つけた奴は、絶望感を覚える」

「ホントに何の役に立たない変態だな！」

「いやあ…タクナリはおもしろいなあ。ちゃんとかまってくれるから、ボケがいがあるってもんよ」

「麗華さんがむちゃくちゃなこと言うからでしょう。まあ…嘘だと思っただけ」

タクナリは溜息をつきながら言った。

「そんなことよりシャワー、いいんですか？」

「おわっ！すっかり忘れてた」

そう言いながら立ち上がると、彼はちよつと待つて下さい。と言
い、タオルを渡してきた。バスタオルより幾らか小さい、普通の
タオル。

「んだこれ。バスタオルならさつき貰ったぞ」

「違います。それ、体洗うときに使って下さい」

「なんで？」

「一応浴室に、体こするやつありますけど…俺が使ってるやつなんで…。やっぱりそうゆうの女性は気にするかなーって」

そんなこと…全然考えてなかった。いやあ…タクナリすごいなあ。気が利くよな。めちやくちや。

「じゃあ…お言葉に甘えて、使わせていただきます」

そう言いながら、私が軽くお辞儀すると、彼もつられながらお辞儀をし、いえいえ。と笑った。

案内された脱衣所へ行き、服を脱いでカゴに入ると、浴室のドアを開ける。

おお。意外と綺麗じゃねえか。浴室は白を基調とした、落ち着いたイメージでここも違う部屋と同様に、綺麗に片づいていた。

適当に頭を洗ってから、先ほどタクナリから借りたタオルを濡らし、軽く絞ってからボディソープをつける。

ソレで体を擦りながら、さっきのタクナリの言葉を思い返していた。

『シャワーでも浴びたらどうです？』

『女性はそうゆうの気にするかなーって思っ』

優しいよなタクナリは。

自然と笑みがこぼれた。

あいつは優しい。いろいろな所に気が利く。だからモテるんだろうな…。

なんだか

「変わってねえな。昔から…」

静かに囁いた言葉は、シャワーのお湯が床に打ちつけられて出る音に負ずに…綺麗に響いた。

トントントントン。

微かに聞こえる音。それは何かを打ちつけるような音。

トントントントン。

でも不思議と嫌じゃない、どこか暖かみのある、懐かしい音。

トントントントン。

その音が、包丁で食材を切っている音と気づくには、しばらく掛かった。

ああ　そうか。昔、朝起きるとこんな音してたっけ。こんな音、どのくらい聞いてなかっただろう？　そういや、そもそも誰がこの音

を鳴らしているのだろうか？第一俺は1人暮らしで…ああ。そうだった。昨日麗華さんが俺の家に泊まったんだっけ…。じゃあ麗華さんが？

俺は眠い頭をゆっくりと持ち上げ起きた。キッチンの方に目を向けると、1人の女性が立っていた。

やっぱりか…。

俺の予想を見事に裏切らないで、そこにいたのは麗華さん。なにやら作ってるらしく、鼻歌なんて歌いながら、手を動かしていた。

俺の気配に気づいたのか、体を後ろにクルッと振り向かせて俺の姿を発見すると、眩しいくらいの笑顔を俺に向けた。

「おお！やーっと起きたか！もう世界はとっくに動いてるぞ！」

「まじっすか…。今何時ですか？」

「えーっと…もう11時になるな」

「うわー。すいません…。麗華さん、何時くらいに起きました？」

そう言つと彼女は豪快にがはははと笑う。

「気にすんな。私もさっき起きたばかりだよ。待ってる！今私が朝飯、兼、昼飯作ってるから。にしても…タクナリの冷蔵庫なんも入ってないのな。スーパーまで買いに行っちゃったよ」

「ええ？なんか…ほんとに迷惑かけてすみません…」

「いいんだよ、別に。私はお礼がしたいだけ。迷惑かけたからな…。タクナリの寝床奪っちゃったし…」

まあ確かに彼女を寝室のベッドに寝かせ、俺はソファ―に寝た。だけれど、それほど迷惑じゃなかったし…。

そう言っていると麗華さんは、

「いや、それ以外に私は迷惑かけたし、それに私が作りたいんだよ。だからタクナリは私の料理を、おいしいと言ってくれるだけでいいんだ」

と、麗華さんは口の端を上げ、ニヒツと笑いながら言った。俺もそれにつられ、笑ってしまう。

「なんか…手伝うことありませんか？」

立ち上がりながらそう言ってキッチンの方に歩き、麗華さんの隣に行く。

「いい！いい！タクナリはなんもするなつ。お礼の意味がなくなんだろ？…顔、洗って来いよ。まだ寝ぼけたツラしてんぜ？平気だつて。こう見えても私、料理上手いんだぞ？」

確かに、彼女はすぐなれていたようだった。普段料理を全くしない俺が手伝っても邪魔になるだけだと思い、素直に言葉に甘えることにした。

「わかりました。俺は出来上がるまで待ってます。そのかわり…美

味い料理、お願いします」

笑いながら言うと彼女は持ってた包丁を俺に向けた。

「上等だよ」

いや、あぶないです、普通に。

確かに麗華さんの料理は美味かった。パスタとサラダだったのだが、パスタは高菜と梅干しの和風パスタで、サラダは自分で作ったフレンチドレッシング、両方ともすごく食べやすかった。

「はあ、腹いっぱいになったー」

そう言いながら麗華さんはソファーにボフツともたれ掛かる。

「いや、でも驚きました。麗華さん、あんなに料理上手だったんですね」

麗華さんは嬉しそうに笑った。

「だろお？私結構自信あるんだよ。つってもさっきのは、ホントに簡単なやつだったけどな。タクナリは料理しないのか？」

「俺は全然。料理とか本当に苦手で、できませんね。いつも外食とか、弁当とかで済ましてますもん」

「ふーん。そうなんだあ」

そう言つと彼女はうーんと伸びをした。俺はそんな麗華さんの横に座り言う。

「時に麗華さん、これからの予定は？」

「ん？なーんもないっ」

「じゃあちよつと、『デート』しません？」

もちろん、深い意味なんて無い。それは麗華さんもわかっている
見たいで

「おっ！いいなあ。ちよつくら外出て遊ぶか」

なんて、オヤジ臭いことを言ってきた。

第4話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

2（後書き）

次回、2人のデート編です。相変わらず大きな事件はなく、まったくデートになる予定ですw あと…この小説の題名長いから略したいんだけど…いいの思いつかない（泣 ただ今、「コンビニ」の呼び方募集してます！^^；笑

第5話・デートは計画的に（待ち合わせ編）（前書き）

更新が遅くなってしまい、大っ変申し訳ありません！！このように、何カ月も空いてしまったりと、かなり不定期更新となりますが、必ず完結させるので、どうか暖かい目で見守って下さると幸いです。

第5話・デートは計画的に〜待ち合わせ編〜

穏やかな風が身を包み、上を見れば澄み切った青空が広がっていた。

デート日和ってやつかな。

そんなことぼんやり考えながら、俺は麗華さんの姿を探す。

そう、ここは地元の駅前で俺はまさに、ここで麗華さんと『待ち合わせ』をしているのだ。

どうしてさっきまで一緒にいたのに、待ち合わせをしなければならぬのか。そのことをまず説明しなきゃいけない。俺の当初の計画としては、自分の車に麗華さんを乗せて行こうと考えていた。しかし、麗華さんに行きたいところを聞くと『駅前をぶらぶらしたい』ということなので、駅前ならば移動手段は徒歩の方が断然楽なわけだが、それでは質問の答えになっていない。じゃあ何故、わざわざ一緒に来ないで待ち合わせをしているのか…。

それは麗華さんがある提案を出したのだ。

「なあなあーどーせならちゃんとしたデートっぽく、待ち合わせをしようぜー!」

「待ち合わせえ？何でそんな面倒臭いことを。別にいいじゃないですか…。このまま行ってしまうっても」

「ったくよお。おまつ…それでも男か？乙女心が分かってねぇつか…麗華心がわかってねぇつか」

「なんすか…その『麗華心』って…」

「んあ？だから私の心を掴むつか、こう…キュンとさせるような」

「ああ、わかりました。わかりました！んで、話し戻しますけど、なんで待ち合わせがしたいんですか？」

「いや…恥ずかしい話、私デートで待ち合わせしてたことがないのよ。だからさ『ごつめーん。待ったあ？』『いや、今来たところだよ』って言う待ち合わせに憧れてたりするんだよねー」

麗華さん1人で、カップルの寸劇をやっているのを見て、器用だなーと関心してしまう。

でも…一応『デート』ならば、

麗華さんも、昨日の服のままじゃ嫌だろう。

それに、女の人は男と違っていろいろ準備とかあるだろうし。

「わかりました。さすがに今すぐってのはいくらなんでも急ぎすぎましたね。時間もありますし、一度家に戻ってから出直しましょう」

「ってことは、待ち合わせだな！？ うっしやあ！ もちろん、『ごつめーん、待ったあ？』『ううん、今来たところだよ』って流れは絶対やるからな」

「いや…そうゆうのは狙ってやるもんじゃ…」

「やらないやコロス」

あの時の麗華さんは、今まで見せたことが無いくらい、恐ろしい表情をしていた。結果的に何が言いたいのかというと、この待ち合わせは麗華さんの理想なデートを演出するためにやっているのだ。

「おーい、タクナリーー!!」

思考が完全に回想に入っていたので、自分と呼ぶ声にハツとする。声がした方に目を向けると、麗華さんらしき人がこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「ハア…ハア。つ、疲れた」

「別に走ってこなくてもいいんですよ？俺逃げませんし」

俺は少し苦笑いしながら、目の前で手を膝に付き息を切らしている麗華さんに言うと、彼女はキツと俺を睨み付け、胸ぐらをつかんだかと思うと、ぼそぼそと話始めた。

「おめえ、バカだろ。待ち合わせっつーのはなあ、遅れた奴が待たせてる相手の名前を呼びながら、走って来るっつーのが、基本だろうが。常識よ？コレ」

「どこの国の常識？」

「るっせーな。細かいこといちいち気にしてんじゃねえよ」

なんだか、どんどん口悪くなってるない？君。

ってゆーか…麗華さん、ドラマとかアニメとか見すぎじゃないか？確かに、テレビとかで流れているようなものは、麗華さんの言うとおり『　ー！！』なんて、走ってくるけど普段ではやらないよ？実際さ、見て。麗華さんが大きな声で、俺の名前なんて呼ぶから、周りの人に注目されてるし…。

なんて言葉が喉まで出かったが、なんとか飲み込んだ。これでまた変なこと言ったならまた、麗華心がなんちゃらかんちゃらとか、言われるのは目に見えていた。

そんなことを考えていると、いきなり彼女が『そーだっ』なんて言い、首元にある手を離れた。

いきなり手を離すので、その反動で少しよろけていると今までに聞いたことがない様な、すごい高い声…つまり物凄いぶりっこをして彼女は言った。

「ごっめーん、遅れちゃって。待ったあ？」

ついでに言うなら、彼女は顔の右側に手を上げて…本当にマンガの待ち合わせシーンで女の子がしそうなポーズをして来たのだ。

「えー…と、取り敢えずそのわざとらしいポーズをやめてくれませんか…」

俺が呆れつつ、彼女の手を無理矢理降ろす。

「は？なんで…？」

「いやいやいや。俺、そのポーズを待ち合わせの場面で、本気で使う人初めて見ました」

「つまり…一般の待ち合わせで、こんなことはしねー。そうゆうことか？」

「まあ…そうゆうこと。」

「なーんだ。せつかくここに来る前に、コンビニで少女マンガ漁りまくって、研究したのによ」

「そんなことしてたんですか…」

俺はもう呆れることしか出来なかった。

「じゃあ気を取り直して、もう一回。　　ごっめーん。遅れちゃっ」

「ストップ！そのことで麗華さんにお話があるんですけど。なんでそんなぶりっこな声で言うんですか？」

「こう言っただろうが、タクナリも答えやすいかと…」

「逆に答えづらいですよ！いいですか？普通に、今までと同じ口調でいいんですよ。じゃないと俺もとっても言いづらいですよ！」

「そう…か。じゃあ、またまた気を取り直して」

そう言うと、麗華さんは軽く咳払いをし、いつものような眩しいくらいのニカツとした笑いを俺に向けた。

「待たしちまつて悪いな。……待ったか？」

少し顔を赤らめて、言う。あー、ダメですよ麗華さん。その顔は反則です。そんな顔されたら…ねえ？我慢が出来なくなるじゃないですか。

俺は彼女に向かって、多分、今まで見せたことが無いくらいの笑顔で言った。

「ええ、とつても」

「デメエ、話が違いじゃねーかこの野郎！！」

「イタタタタ！！あのセリフ通り言うとは言っていないじゃないですかあー！！」

「ばっ！おまつ、普通そこはあーゆーようなセリフいう所だろうがよお！空気読めよクソ！」

「ごめんなさい！ちょっとからかいたかっただけなんです。悪気はなかったんです。だからお願い、そこはつねらないでええええ！！！！」

どこを、つねられたかは、みんなの想像に任せる。

第6話・デートは計画的に〜買い物編〜

とりあえず、麗華さんは怒らせたら怖い。とゆーか痛い。

これからはあまり、からかわないようにしようと学習した、寿君でした。

今久しぶりに俺の名字が出てきて、びっくりした人がいるだろう。最近麗華さんに『タクナリ』って呼ばれているからみんな忘れていると思うが、俺の名字は寿だ。忘れないようにしてくれ。

なんとか麗華さんを落ち着かせることが出来、（興奮させた原因は俺なんだけど）気が付くとかかなりの人に注目されていた。

それもそうだろう。麗華さんが来た時点でかなりの人の好奇心を集めていたのだが、そこからの俺達の言動、最後にはあんな戦闘まで繰り広げていたら、人間以外の動物だって興味を持つに違いない。

さすがに俺と麗華さんも恥ずかしくなって、逃げ込むように近くのカフェに非難した。

俺達が逃げ込んだカフェは駅前にある小さな店で、なんと女性が好きそうな、可愛いお店だった。

店内に入り、俺がアイスコーヒー、彼女はアイステイを頼むと、注文したものが飲み物だけだったので、すぐに来た。

俺の元にアイスコーヒーとミルクとガムシロが一つずつ。麗華さんにも同じく、アイステイとミルク、ガムシロが一つずつ置かれた。

んー…俺ガムシロいらないんだけどなー。

俺がミルクしか入れないのに気づいたのか麗華さんが、話しかけ

てきた。

「ガムシロ…使わねーの？」

「あ…はい。……使いますか？」

「おう！私甘党なのさー」

そう言いながら右手をヒラヒラさせる麗華さん。

うーん。それっぽいつちゃそれっぽいいし、ぽくないったらぽくないな。

カチャカチャとストローでかき混ぜながら、俺はふと疑問に思ったことがあった。

「そついや、俺の家の場所誰に聞いたんですか？」

麗華さんが俺の家に来るのは初めてだったのに、なぜか場所を知っていた。麗華さんは昨日コンビ二人に教えてもらった。としか言わず、俺はそのことを聞こうと思っていただけのだが、なかなか聞くタイミングがわからず（ただ忘れていただけ）いつ聞こうか考えていた。

「ああ。名前…なんだっけなー？覚えてねーなー」

「なんかこう…特徴とかありません？」

「特徴なら覚えてるぞ！一人がだな…ロングの髪を二つに結んだ、小さくて、空気の読めない女の子。」

「空気の読めない……？」

「そうそう。他にも、興奮すると前が見えない女の子。とか、恋する純粋な女の子。とかそいつはいっぱい特徴があったな」

「ん？わかんないなあ…。」

「あの女、可哀相。タクナリに覚えてもらえなくて…よっぽど影が薄いんだな」

そう言つと麗華さんは、彼女の癖でもある、ハツと言つ笑い方をした。

「そんなこと言っちゃダメですよ。俺の記憶力が悪いんですから」

「いやいや、色んな意味で可哀相だと思うぞ？私は」

そう言つとクツクツと笑う麗華さん。

本当に楽しそうに笑ってるな、この人は。

「……で、その人だけだったんですか？」

「んああ。もう一人がーあいつだ。ほら、この前一回私が見かけたことある、いつも寝てる奴！」

「ええ！？新田さんですか？」

「そうニツタ！やーっと思ひ出した。そいつだよ」

「あのニツタさんが…。つーかあの人が起きてたんだ」

「いんや、多分トイレで起きてたんだと思う。だって私に地図書い

てくれたらさっさと走って、トイレの中入ってったぜ」

「そんなことだろうと思っていましたよ」

「でも…ひとつ気になることがあるんだよね…」

「はい？なんか言いました？」

「いんや、なんでもねえ」

そう言つと、麗華さんはがはははと笑う。でもいまいち意味がわからない俺は笑うことは出来なかった。

しばらく他愛もない話をした。いつもコンビニと話すときは、時間も場所も違うせいか会話の内容も大分違ったのがまた新鮮に感じて、飲み物一杯で随分と長居してしまった。店員にすればすごく迷惑な話だろう。

「うつわ。結構喋ったな。もうこんな時間だよ」

麗華さんの言葉に反応して、店内の時計を見ると店に入ってから一時間近く過ぎていた。

「そろそろ行きますか。店員さんの視線も怖くなってきましたし」

「あー…確かに、な」

そうゆう麗華さんは、どこかおもしろそうに、ハッと笑った。

さて、場所は変わって先程の待ち合わせ場所に戻った俺たちは、次にどこにいかうかと考えていた。

「うーん…」

デートに切り出したくせに、何も考えていなかったことに少し後悔。ただ単純に、麗華さんといろんなことを話してみたいと思ってたので『そこら辺、ブラブラするぐらいでいっかー』という甘い考えでいた俺は、今の状況は少し焦る。

最近『女性とデートをする』なんて生活とはかけ離れていたせいか、デートと仕方なんてすっかり忘れていた。

余談だけど、俺は中学3年から高校2年にかけて、人生誰しも一度は経験するであろう『モテ期』で、かなり調子にのり、いろんな女の子とつかえひつかえした時期があった。言ってしまうえば、その日だけ。つまり、ベッドの中で一夜過ごしたらポイなんてことも、何度かあった。まあ、その浮気癖がたたって、高校3年になってからは、女の子との付き合いはめっきりなくなっただけ。

今俺がこうして普通に思いたせるのも、俺自身が充分、後悔や反省を繰り返したからだと思う。

話が十分逸れたけど、俺が言いたいのはその『モテ期』に比べたら、女性の扱いが全然慣れてないということ。更に話を縮めると、やっぱり俺は困っていると言うこと。

こんなことになるなら、少しは麗華さんを見習って、コンビニかどこかでデートマニュアルみたいなのを、読んで来るんだった。

「なあ、もしかして行くところ迷ってる。って感じかい？」

まさかの凶星をつかれてドキツとする。でも、変に嘘をつく必要もないので、素直に答えることにした。

「あー、まあそんなところですよ」

ハハハと苦笑いしながら答えると、麗華さんは『じゃあさ！』なんて言っただけに俺にある提案を出した。

「おっ、これも安いなあ」

え、えーと……。

「安い安い！これも買いだな」

今日の前では、麗華さんがとても楽しそうに駆け回ってる訳で…。

「あーとは…ああ！アレだ！」

まあ別に、彼女が喜んでいるならどんな場所でもいいのかなあ。なんて思っているのだが…。

「あと…あーこれも安いー！！すげーな…」

でもさ…うじ。

「あー砂糖安い！さすが特売日は違いな」

あの…スーパーなんだけどお!?

「あ?どーしたタクナリ。ボーツとしてよ」

「いやいやいや。いやいやいやいや!え?……ちょ、ええ!?」

「落ち着きなさい。なにをそんなに慌ててる」

「慌てるっつーか、驚いてるっつーか、驚いてるっつーか…」

「いや、だから落ち着けて。ホラ!深呼吸!」

麗華さんが『スー…ハー…』と言うのに合わせて、ゆっくり深呼吸する俺。いくらから落ち着いたので、ゆっくりと麗華さんに尋ねてみる。

「だ、だって俺デートでスーパー来たの初めてなんですけど」

例えば、

『これから、おまえの家行って手作り夕御飯でも食べに行こっかな』
『』

『んもっ、いきなり何言ってるの?』

『しょうがないだろ?おまえともしっかりしたんだからさ』

『ったく…。なにが食べたいの?』

『ハンバーグ…かな。そのあとは、もちろん。ね?』

『……………もう。じゃあ今から材料買いにいこう?』 みたいな流

れで買いに行くならわかるんだけどさ。

でも、ね?だってホラ……。

「タクナリ……おまえ、かなりキモい。全部声に出てる」

「嘘おおおおお!？」

「いろんな意味でがっかりだよな。まず一番の問題は、妄想力が中学生並みっつーことがさ……」

「うるさあああい!!ごめんなさい!俺が悪かったです!」

「しかしタクナリがそんなことを考えているとはなー。そーゆーことがお望みなら、タクナリの為に裸にエプロンで」

「ほんとに!!ほんとにいいですから!ちょっと調子にのっただけですから!」

「そうか……。いや、別に無理をしてるわけじゃないんだぞ?」

「麗華さんが無理してるしてないじゃなくて、俺が無理なんです!この話題が耐えきれないんですよ!もう、この話題やめませんか!やめましょう!!今すぐに!!」

「はいはい。あー楽しかった。タクナリいじりも楽しいな」

心底楽しそうにいった麗華さん。そりゃそうだろう。終始ずっとニヤニヤしてたもん、この人。

しかし、この人に弱みを握られたら、本当に終わりだな……。気を付けよう、うん。

「じゃ、タクナリのためにも、エプロン買わなきゃなあ…」

もう握られてたああー!!

しまったあーあれは完璧な弱みだ!!

「れ、麗華さん…この話は、もう…終わ」

「アイス」

『り』という前に彼女は一つの単語を発した。それはこの時期になると、一度は食べるおいしいデザートで……。今この状況で、彼女の言葉を聞いて、なんとなく、というかほ言いたいことはわかった。まあでも、ここは聞き返すのが、自然な流れであり、暗黙の決まりなのだと思うので、薄々気付きながらもきちんと聞き返す。

「……はい？」

「この話題をやめてほしかったら、アード、他の人に言われたくなかったらパゲちゃんアイスおこれや」

やっぱりそんなことだろうと思った。『アイスをおこるだけ』というのは、随分と軽い内容なのだが。

ちなみに、麗華さんが言っている『パゲちゃんアイス』とは、コンビニやスーパー等で、他のアイスと並んで売っているも、ちょっとだけ格別扱いされている、あの値段が少しだけ高いという『ハーゲ○ダッツ』のことである。初めて聞いたときはかなり驚いたが、何回も聞いていれば嫌でも意味がわかるので、俺はもういちいちツッコまない。

「そんなことだろうと思いました。本当に好きなんですネ」

「もうヤバイな！アレは。神だよ神！！ネ申と書いて、神だよ！」

「それ、前から聞いてますから。この間も同じこと何回も繰り返してましたから！」

とりあえず、その『パゲちゃんアイス』を五つほど奢るということでの話はなんとか落ち着いた。

俺としても、それだけでこの話を終わらせてくれるなら、ありがたい話である。

その後も、麗華さんはなんとも嬉しそうに値引きされている商品
を、どんどんとカゴ入れていった。

なぜここに来たかったのか彼女に聞くと、今日はポイント二倍の
日らしい。

なんともまあ…家庭的な人だ。

第6話・デートは計画的に〜買い物編〜（後書き）

第6話ですね。「6話目にして、もうデート？」思う方がいらつしやると思いますが、あまり寄り道をせず、スス〜と進んでいこうと考えております^^まあ私は文才がないので（汗）遠回りしてしまふ可能性も大いにありますが^^；暖かい目で見守ってくださいると嬉しいです^^

第7話・時季違いの恋の季節（前書き）

またまた更新が大変遅れてしまい、申し訳ございません。

第7話・時季違いの恋の季節

「うす！タクナリ。今日も金稼いでるかあ？」

「どうも。つかそれ、中年のオッサンが言いそうなセリフですよ」

「いいじゃねえかよ、別に。私がオッサンみたいなこと言ったら、世界が困んのか？あん？」

始まった…。最近彼女は喧嘩口調にハマッいてるらしく、俺が何か言つと田舎ヤンキーみたいな屁理屈を言いながらキレるのだ。

彼女曰く『反抗期』らしい。

なぜ反抗期にハマッているのかはわからないが、多分気分が何かなのだろうと思う。

「なあ、次の休みっていつ？」

「次は…今日、明日とやって…明後日休みですね」

「オッケー。明後日な。じゃあさ、お前んち遊びに行つていい？」

「ああ、いいですよ。午後からなら平気です」

麗華さんと『初デート』をしてから約2ヶ月後。

彼女はあれからよく俺の家に來ては、昼御飯や、掃除などの家事をしてくれるようになった。これは本当に助かることで、家事全般出ない俺にとってはすごく嬉しい。

普通女性が、独り暮らしの男性の家に行くなんて、恋愛感情や何やら生まれるのかもしれないが、なぜか俺達にはそんなことはないと思えていた。

まあ、そう言い切れる確実な理由がちゃんとあるのだけど…。

ピンポンピンポン

「いらっしやいませ」

音に反応して、入ってきた客に挨拶をする。

それを見た麗華さんは静かにその場から退き、俺と他人のフリをする。彼女も客が来るとその場から消え、客がいなくなると戻ってくる。という一応の気遣いも見せている。

「ありがとうございますー」

「なあなあ、今日は…いないのか？」

客がレジから離れて行くと同時に、こそこそつと麗華さんが寄ってきた。

「え？なにがですか？」

「あいつだよ…。あの…ほら」

「ああ、新田さんですか？」

「そうそう！ニッタ、ニッタ」

「いつもみたいに、奥にいますよ」

「お、おお。じゃちよつとお邪魔しマース」

彼女が奥に入っていく姿を見送ると、自然にため息がこぼれる。
そう、確実な理由。それは多分、彼女が新田さんに恋をしているから。

先日彼女が僕の家を訪ねる時から、麗華さんは新田さんのことを気になっていっつぱいのだ。
本人は隠しているつもりみたいだが、俺こいつにしてみれば『気付かない』方が無理な相談である。

先ほどの『分かりやすい』態度を、そう何回もされると他の人の恋愛に疎い俺でもすぐにわかってしまう。
どうやら麗華さんはポーカーフォフェイスが苦手らしい。

正直な話、なんだか寂しい気もする。失恋とかの寂しさではないのだけど、なんだろうなあ……。

「お姉さんが遠くに行っちゃう感じー？」

「寿さんで、シスコンなんですか？」

「うおっ!？」

俺が完璧に自分の世界に入っているときに声をかけられ、心臓が飛び出そうになったのをなんとか抑える。

声をかけられたほうを見ると、後ろに綺麗に真ん中で髪の毛が分けられた後頭部が見えた。視線を下に向けると、なんとも言えない冷

たい視線を俺に向けた、ちっちゃい女の人がいた。

「ひ、春沼さん……」
ハルヌマ

「トイレ掃除終わりました」

「お、疲れさ、まです……」

ブレの無い通った声で淡々と言う彼女に、先程の驚きが一気にしぼんでいくのがわかった。

「にしてもまさか、寿さんがそんな人だったなんて……」

「いや、違っんですよっ！？これは、なんというか……心のすきま風の原因を語ったというか……」

「何言ってるんですか」

彼女はまるで俺を心底馬鹿にしているようにため息をついた。いや、多分馬鹿にしているんだろう。

「てゆーか寿さんて、お姉さんいたんですか？」

「いや……お姉さん……って言うか、何ていうか……」

「ああ、従姉妹の川北さん、ですか？」

「あ、まあ……。そんなところです」

「あの人。変な人ですよ。この前会ったとき、凄く礼儀正しい人

だと思つてたのに、さつきまでの喋り方っ。絶対猫被つてたんですよ」

春沼さんは、麗華さんが新田さんと始めて会つた日、つまり、俺の家を教えてもらったときに一緒にいたらしい。

春沼さん本人から聞いたわけではないのだが、先程の春沼さんの発言や、麗華さんが『空気の読めない（つて言うのはどうかと思うが）女性店員がいた』。と前に言っていたことなどを考えると、その店員が春沼さんであることは明白だ。

「そんなこと言っちゃダメですよ？彼女は親しい人には、自分が使い慣れている言葉遣いを使っているんですよ」

多分……。

と、直ぐ様心の中で付け加えた。

一応麗華さんにフォローはしておいたものの、断言はできない。なぜなら当の本人（俺）が初対面で喧嘩口調だったのを思い出したからだ。

「どうでしょうね？仮にそうだとしても、私はやっぱり常識がなっていないっていうか、失礼な人だと思います！夜中にコンビニでギヤー騒いでいるだけでも迷惑なのに……。最初の頃は仕方なかったのかも知れませんが、今ならメールアドレスくらい、お互い交換しているんですよ！？だったら、わざわざここに来なくても、携帯で連絡すればいいじゃないですかっ……！」

確かに、春沼さんが言っていることは正しい。あの一件以来から、またすれ違いが起きない様にと、俺たちはアドレスを交換していた。でも、毎日の様にメールするわけではなく、本当に必要なメールし

かしないのだ。だから、俺たちのコミュニケーションをとる場所として、必然的にココが俺の家くらいなのだ。

だからと言って、毎日のように俺の家に来ていたら、もうそれは『同棲』に近いようなものがして……。正直な話、そこまで一緒にいたくない。彼女とは、ココでだらだらと喋るくらいが丁度いい様な気がするのだ。

俺がそんなことボーツと考えていると、いきなりトーンが落ちた声で『それに……。』と春沼さんが喋り始めた。

「それに、最近の川北さんの行動は寿さんが可哀想です」

「えっ？俺っ！？」

「はい……。だって最近、親戚の寿さんを、放つといて、新田さんのところばかり……。」

ハハハっ。まさか、そんなことで春沼さんに心配されるとは。

「俺は全然可哀想なんかじゃないよ。そりゃ寂しくない、なんて言ったら嘘になるけど。あの人と一緒にいると楽しいから、『ああ、もうあんな風に喋れないのかー』とか思うとね。でも別に、そんなにシヨックな訳でもないし……。これがまた、俺が麗華さんに特別な感情を抱いていたなら、話は変わったかもしれないけど……。」

「……………は？」

「いや、は？って」

もっと、こう……。しみりした空気にくれっただて……。ちなみに、今の春沼さんの表情は、眉間にしわを寄せ、『おまえ……………何

言ってんの？』みたいな顔をしている。

「え？だって寿さんと、川北さん……。付き合って、いるんじゃない？」

今度はこっちが『は？』である。

「春沼さん。なんの勘違いしているのかわかりませんが、俺と麗華さんはそんな関係じゃないですよ？」

「ええっ！？そうなんですかつ！？」

驚きのあまりなのか、俺の胸ぐらを掴んで、ぐいっと顔を寄せてくる。

「ちょ……。ぐるじつ。春沼さん、離して〜」

「え？……キヤアっ！！」

そう言いながら、今度は俺を突き飛ばす。女性の力なので、転ぶまではいかないのだが、多少よろめいた。

「つとと……。はーるーぬーまーさん〜。落ち着いてください！！質問があるなら、ちゃんと答えますから！！！！」

「じ、ごめんなさい。つい、取り乱しちゃって……」

「まあ、いいですよ」

春沼さんが『ふう』と、息を吐いて落ち着いたのを確認して、俺

は先程の質問に答えた。

「さっきも、言ったけど俺と麗華さんはそんな関係じゃないんです。たまたま近くに住んでいて、たまたまココで知り合った、言ってしまえば『友達』なんですよ」

「あ、そう……。そっかー。ハハ、なんだー。そうなんですかー」

俺の答えに納得がいったようで、段々もとの春沼さんに戻ってきた。

春沼さんがあんなに興奮している姿を見たのは初めてなので、かなり驚いたのだけど……。うーん、春沼さんもあんな所があるんだなあ。しかし、なんだか春沼さんが嬉しそうなのは、気のせいだろうか？

「え？じゃあ……。『ココで知り合った』って、川北さんは親戚なんじゃ……。」

やばっ！うつかり言ってしまった！！まあ、言ってしまったものはしょうがないか……。

「実は……従姉妹って言うのは嘘、なんですよ」

「やっぱりー！そんな感じはしてたんですねー！！だってあの時と今じゃ全っ然態度違いますもんっ」

「あゝ……ハハハハハ」

苦笑いしかできない俺。だって猫被っている姿を、見ていないの

だから、なんとも言えない。

「あーはいはい。じゃあそーゆーことで。じゃあ、またなー」

「あ、麗華さん。もういいんですか？」

奥から頭をボリボリ掻きながら出てきた麗華さんに、声をかける。
その行動は女性としてどうかと思うが……。

「お？おお。んーもう報告は終わったしなー」

「報告……？」

「いんや、気にすんな」

そんな会話をしていると、春沼さんが俺をドンッと押し退けて、
麗華さんの所へ近づいた。

「川北さん！ー！」

「ああ？」

ちよつ。麗華さん……。なにもそんな喧嘩口調で！ーほらほら
！春沼さんちよつと後退りしちゃってるしつ。

「っ！ー！そ、そんな口調でも私はめげませんよ！ー！めげませんっ」

「なあ、タクナリ。こいつ何がしてえんだ？」

「いや……俺もよく……」

「川北さんっ!!」

「だからなんだよ」

「あんまり、寿さんに迷惑かけないでくださいっ!!」

「はあ？」

「し、失礼しました!!」

え?どういうこと?

と言う、俺たちの疑問には答えることはなく、春沼さんはまるで頭から煙りが出そうなくらいの勢いで奥へ入っていった。

「なあ……タクナリ」

「なんですか？」

「あいつ誰だ？」

「ええっ!？」

その後の話。

「うるさい人がいなくなったと思ったら、またうるさい人が来たー
……」

「うつつ、うるさいです！新田さん！！」

「いやだから、うるさいのはアンタだからね」

「恐かった……恐かった……心臓が飛び出るかと思った」

「ヤクザでも来た？」

「私にとつては、ヤクザよりも苦手ですつ。ああああ、私はなんてことおおおおー！」

「とりあえず、落ち着こつか」

「落ち着いてますよつ！落ち着いているから、今後の事を考えてす
つつつごく後悔しているんじゃないですかー！」

「ふーん……。なんとなくわかった。面白いねえ。人の恋愛って」

「は？なんか言いました？」

「んにゃ、なーんにも言つてましえん」

第8話・人の名前は間違えないようにしましょう（前書き）

今回、会話文多めです；；、

もし見にくい、伝わりにくいようでしたら指摘お願いします。

加筆させていただきます^^；

誤字・脱字報告、並びに感想・評価お待ちしております。

第8話・人の名前は間違えないようにしましょう

「うおーい。出来たぞーい。起ーきろー」

「うつ！ぐはっ！ちよっ！れ、！麗華……さんっ！……うつわ。
いい匂い！！ぐお！」

会話文だけでは、一体どんな状況か理解できない人が、ほとんどだろう。

簡単に説明すると。彼女はいつもの如く、夕御飯を作りに来てくれたのだが、俺は何故か突然の睡魔に襲われ、仮眠をとっていたのだ。料理が出来たのか、彼女が俺を起こしてくれたのだが、その起こし方が全て蹴りという、なんとも彼女らしい起こし方だった。

「しょうがねえだろー。両手塞がってるんだから」

確かに右手にしゃもじ、左手にお椀、となんだか主婦のような格好をしているが、でも蹴りってというのはどうかと思う。

「って！！まだ蹴ってるし！！」

「ちよっ、いいっ、加減！蹴るのっ……やめっ！」

「早くしないと、ご飯冷めてしまうんですけどー？……あら？……
うぎゃあ！！！」

その瞬間、今まで俺の腹を蹴っていた麗華さんが、バランスを崩し今までは違つところへ蹴りを入れた。

しかも、転ばないように蹴っていた足を踏張るようにしたため、俺に痛恨の一撃が加えられた。

「~~~~~!!!!」

「あ、悪い。まさかのクリティカルヒット？」

「まさかの…………クリティカル…………ヒット、です」

「いやー、すまん、すまん。まだ使えるよな？」

「た、多分…………」

「試すか？」

「アホか!!!!!!」

どこにあたったかは、想像で頼む。

と言うか彼女、この前の待ち合わせの時といい、大事なところばかり攻撃している気がする…。

「たまたまだよ、多分」

どうやら彼女は人の心が読めるらしい…。

「いつもすんません。ご馳走様でした」

「はいさー。今日味付け濃くなかったか？」

「そうですか？そんな感じはしなかったですけど」

「マジでか。じゃあタクナリは味が濃い方が好きなんだなー」

なんて他愛もない話をしていると、麗華さんがいきなり『んあ？』と声を出し、辺りをキョロキョロと見回した。

「ん？どうしました？」

「なあなあ。なんか、声聞こえねえ？」

一瞬背筋が寒くなる。幽霊の類いが大の苦手、という訳ではないが、そう言われるとそっちの方向へ考えてしまう。そんな俺の気持ちに伝えるように、麗華さんが付け加えた。

「いや、そういうのじゃなくて、なんか騒いでるっつーか……」

その声を聞いて、思い当たる事がある俺は安堵の息を漏らす。と同時に、麗華さんに説明した。

「ああ、多分高校生の奴らですよ。ったく、あいつら」

「なんだ、知り合いか？」

「いや、まあ。あいつら、時々あそこの公園……ほら、このマンシ

ヨンの真向いに、公園があるでしょ。そこで騒いでるんですよ。一度注意しに行っただんですけど、なんかそれから向こうが慕ってくれて。後輩みたいな感じです」

「ほーっ」

意外、とでも言うような顔で俺を見る。そしてそのまま固まった。その瞬間俺は、とてつもなく悪い予感がした。だって見えてしまったから。彼女頭の斜め上辺りに、『ピカーン』と光る電球マークを。彼女が電球マークを出すときは、決まって何かを思いついたとき、それでもってその閃きは、必ず俺もセットで巻き込まれるのだ。

「ねえ……」

麗華さんの顔がグッと近寄る。

「祭りに参加しようぜ」

「はあ……」

「なーにそんな溜息ついてんだよ。楽しい方がいいダロ？」

「確かにそうですけど……」

別にいいんだけどね。いつもお世話になっている分、なるべくこういうことに付き合って行きたいと思っていたし。

そう。俺達は、麗華さんの提案で真向かいの公園に向かっていた。麗華さんが、その高校生達と話してみたいと言いだしたのだ。

「でも、本当にうるさくて、生意気なやつらですよ?」

「生意気の方が話しやすいだろ。大丈夫、大丈夫。これでも年下には懐かれるほうなんだよ」

「そうですか……。なら良いですけど」

でもやはり気持ちは乗らない。なんてったって、あいつらに会わせる訳だからなあ。

そんなことを話していると、公園の中で騒いでいる声が、先ほどより大きくなった。

見ると彼らは、5、6人で花火をやっているらしい。

「あれ? 拓也^{タクヤ}さんじゃん」

「え? ホントだ拓也^{タクヤ}さんだ」

「どうしたんですか? 拓也^{タクヤ}さん」

「どうした、じゃねーよ。うつせえんだよ、おまえら。あと俺の名前タクナリだから!」

こいつらは打ち合わせでもしていたのか?

「あ、すんません。拓也さん^{タクナリ}」

「以後気をつけます、拓也さん^{タクナリ}」

「細かいっすね、拓也さん^{タクナリ}は」

右耳に付いているピアスが目立つ男が小さな声で呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

「人の名前間違えるのがいけねんだよ!!」

「っーか、俺らそんなうるさかったすか？」

ピアス男が俺の意見をまるつきり無視して聞いてきた。

「あーもう、うるせえ、うるせえ。俺のマンションまでおまえらのバカ騒ぎが聞こえたわ」

「いやーすんません。俺ら拓也さん大好きだからなあ」

「はあ？」

「なに気持ち悪いこと言っただ、おまえら」

「俺らの愛の叫びが拓也さん呼び寄せちゃったんだよな」

「その通りだな、間違いねえ。だから拓也さん現れた訳だ」

「だって俺ら拓也さんのこと思いながら花火してたもんな」

そう言つとこいつらは納得したように『そうだ、そうだ』なんて頷き合っている。

「すると……アレか。あんたらはタクナリのことを思いながらも、いい女いねーのかなあ。つて思つてたつてことか」

今までずっと黙っていた麗華さんが、腕を組ながら近づいてきた。

「うわっ！ちよ、誰っすか！？拓也さん」

「いやーまあ、この人はアレだ」

「彼女っすか？」

「いや、違う違う」

「あー彼女なんすね」

「人の話聞いてるか？日本語通じてますか？」

「にしても拓也さんの彼女。おっぱいでつかいつすねー」

明らかにいやらしい目付きで、麗華さんの体を見る高校生の一人。

うわー、こういうのがあるから麗華さんに会わせたくなかったんだ。こいつらは、男同士で話すような下ネタを普通に男女関係なく発言してしまうのだ。

つたく、こつちがフォローしなきゃならねーんだぞ。

「あー本当だ！めっちゃでけえ！つか超やわらかそう」

「いや……あの麗華さん。こいつらは」

「んだおめえら。こんな乳も見たことねえのか」

え！？

そんな言葉を発したのは、意外や意外。麗華さん自身だった。

そんな俺の驚きなんて知らずに、彼女は自分の胸を揉む。

「見たことねーっすよ、マジ。何カップなんですか？」

麗華さんの態度に気を良くしたのか、わらわらと彼女の周りに高校生が集まる。

隣にいる彼女は、ガハハハなんて呑気に笑っているのが、また驚きで。

でも麗華さんが一体どんな受け答えをするのか、少し楽しみなので、俺は見守ることにする。

「いやー、皆若えなあ。そんなに知りたいか？」

興奮気味にコクコクと頷く彼ら。

なんだか、男としてその姿は情けないぞ。高校生達に今、自分の意思表示をするための犬のような尻尾があるなら、多分風が起きるんじゃないかってくらい、ブンブン振り回されているだろう。

「ハッ、教えるかハゲ」

あ、尻尾止まった。

一瞬のうちにうなだれていく高校生達。

そりやそうだろう。麗華さんがそんな簡単に自分の胸のサイズを言うはずが無い。

「それに言わないで妄想するほうが、やりがいがあるってもんだろオナ」

「ストオオオOPP!!」

今まで見守って来た俺だが、今麗華さんがサラッとすごいことを言おうとしたようなきがするので、直ぐさに彼女の口を抑える。

「ふぁにすんだおお、ファクナリい」

「ダメです、麗華さん。女の人がそんな軽々しく下ネタを言ったら。このお話は、そういう露骨な表現を避けているんです」

「言ってる意味あ、よくふぁかんねえよ」

「え？そんなに言っちゃダメなんすか？オナ」

「どりゃあ!」

「ぐはっ……!」

またもや禁止ワードが出そうだったので、そいつに裏拳を一発食らせて、大人しくさせる。

「あの拓也さん。なんだか随分と扱いがひどくないですか」

よく見ると殴ったのは先ほどのピアス男だった。

なんかさつきから、こいつがよく絡んでくるなあ。

そいつが起き上がりながら抗議をしたが、そんなものは知らん。
聞こえん。

ある程度高校生たちと話し、麗華さんが満足したようだったので帰ろうと戻ろうしたら引き止められ、『もうちょつといてもいいじゃないっすかー』なんて言われたので、特に様もなかった俺たちはしばらくそこにいることにした。

と言っても彼らと一緒に遊ぶ訳でもなく、彼らが花火をやっている場所から少し離れたところのベンチで、その様子を見守っているだけなのだ。

「にしても、若えなあ。あいつら」

「本当ですね。まあ俺も高校の時、あんな感じでしたけど」

「へえ。なんかタクナリ、高校の時は悪かった。って感じだよな」

「あー……授業中にお菓子食べたりとか？」

「あと授業中に寝たりとかな」

2人で『小さいな！』なんて言いながら笑い合う。

すると、高校生の軍団の中から、1人がこちらに向かって近づいてきた。

うわ…。ピアス男だ…。

「おまえ、一緒にいなくていいのか？」

麗華さんが聞く。

「いやーなんか疲れちゃって」

「遊んでて疲れるって、今の高校生そんなこと思っのか。俺なんかの時は、授業中とバイト以外の時は疲れたなんか思わなかったぞ」

「俺、そんな若くないっすよお」

「私よりも若いやつに言われると、嫌味にしか聞こえないな」

「あー確かに」

「そんな意味じゃないですよ！！まあ俺体力はあるほうなんですけど、花火ってあんま好きじゃないんですよね」

「ふうん。私は好きだぞ、花火」

「麗華さんらしいですね」

「そうかな」

「俺も小さい頃は好きだったんすよ？他の事は率先してやんだけどなあ。ホラ、倉持クラモチとか体力無いのに、かなりはりつきてますし…」

「あ？誰だそいつ」

「何言つてんですか。倉持っすよ！！」

「名前じゃなくて、特徴で言ってくんねえかな？」

「もしかして…拓也さん、名前覚えてもらってないんですか？」

「オイオイ、覚えるも何も、俺おまえらの名前なんて知らねえよ」

「ええー！？言つてませんでしたっけ？」

なんで俺の周りには、自分の名前を言わない奴が多いんだろう。

「すると、アレか？タクナリは名前も全く知らねえのにこんな慕われていたのか？じゃあタクナリの目には、高校生の軍団にしか見えなかった訳？」

「ええ、まあ」

「こいつらバカだなー」

あなたが言えないでしょう、全く。俺も最初あなたを、コンビニの常連さんにしか見えてませんでしたよ。

「じゃあ折角なんで、覚えて下さい！俺の名前だけでもいいんで」

「ああ、わかった」

「俺の名前、田中^{タナカ}って言うんです！-」

「うわー……」

「なんすか、拓也さん」

「ここに来てまさかの普通の名字だな」

「ああ。私も聞いた時思った」

「どういう意味っすか！寿だって一般的な名字じゃないですか！拓也さんの彼女さんだって、まだ名前聞いてないけど普通の名前じゃないんすか！？それに、一般的のほうじゃ覚えやすいでしょ！？」

「タクナリの名字は珍しい方じゃないか？」

「ええ、そんなに見かけないですね」

「いや、でも小川くん。一般的な名前でもいいじゃないか」

「田中ですつ。それに俺一般的な名字、否定してませんよ？一言も！-」

「そうだよ中田くん」

「惜しい！田中ですつ。つかタクナリさん、そこまでわかってい
るんなら、ちゃんと呼んでくださいよ」

「ごめん、ごめん。とうなかくん」

「意地でも田中と呼びたくないんすね、コノヤロウ」

「だっておまえさつき名前間違えてるっていったら細けえって言うてたじゃねえか。だから、別に一文字くらい間違えたっていいだろ？」

「わかりましたよう。もうそんなこと言いませんよう」

「ったりめーだよ」

「ってことは他の奴らの名前も知らないんすか？」

「全く知らねえ。知ろうとも思わねえ」

「うわー、タクナリくんDSだねえ」

「いやいや彼女さん。拓也さんいつもあんな感じですよ。だから俺らちよつとびっくりしてるんです。『拓也さんが敬語使ってる』って」

「へえー」

む。何をこそこそ話しているのだろう。目の前にいるのに内緒話されると、まあ……気分はよくない。

「コラコラ君たち。そこで、こそこそ話なんてしないの」

「あー悪い、悪い。タクナリくんヤキモチやいちゃうもんなあ?」

「そういう訳じゃないですけど……」

「ヤキモチなんて拓也さん可愛いつすねー」

「ちょっと黙ってるテメーは」

パシッと田中の頭をたたく。

「……って!! だから扱い違くないですか?」

なんか言っているが、知らん。聞こえん。

第9話・動き出した恋愛

「花火しようぜっ」

俺があぐらを書いてテレビを見ると、彼女は鼻息をふんつと鳴らしながらテレビの前に仁王立ちする。俺は、返事や詳細を麗華さんに聞くわけもなく、彼女の向こう側にある隠れてしまっているテレビをぼーっと眺めていた。

「ちよつとばかり時期が遅れたがそんなのは関係ない！」

そんなことはお構いなしにセリフに合わせ右足をどんつと足踏みする。

「やっぱりこういう季節の行事には、ちゃんと参加しないと思って思
うんだよな」

身振り手振りで自分の中の何かを表現しているらしい彼女。

「やっぱり来たか」なんて思いながら自分の頭を掻くと、「聞いているのか！」とその頭を軽く叩かれる。

「まあ予想してたことはありませんね」

「なにが？」

「この前の高校生が花火やってるの見てやりたいなーとか思ったんでしょ？」

「おう！」

何の意味なのかはわからないガッツポーズを決めている麗華さん。

ああ…もう花火やりたくてしょうがないんだな…。

「で？タクナリはやんのか？あん？」

ヤンキーが喧嘩を売ってくるような口調で問い詰めてきた。彼女のこういような言い方はもう慣れたけど。

「まあ…いいんじゃないですかね？今なんもやることないし」

「うおっし！そうと決まればホレ、花火買いに行くぞ！」

言っただと思えばもう玄関で靴を履きはじめている。

「ちょ、麗華さん、慌てない！戻ってきてください！」

「なんだよ？早く行こうぜ」

「いいから、ホラここに座る！」

そう言っただけ麗華さんをソファに座るように促す。

「なんだよ？」と、不思議そうに言う麗華さんに

「だから、予想してたって言ったじゃないですか」

と、言いながら花火がたくさん入ったコンビニ袋を渡した。

「……………え？」

「時期が時期なんで、もう売れ残ってるんですよ、花火。だから店

長に言つて安く売つてもらつたんです」

「マジかよ…さすがじゃんタクナリ！私、お前のそういう所大好きっ、ありがとうな！」

その瞬間誰かに胸を捕まれたように、きゅうつうつとなった。久しぶりの感覚だ。いい歳をした男がこんなこと言つのもどうかと思うが、わかりやすく言えば、俺は今、「胸キュン」をした。

どんなに口が悪くてもこんな美人なのだ。そんな人に笑顔で大好きなんて言われるともう…さ…アレだよ…うん…。

破壊力抜群だぜコンチクショオオオオオ！！！！

「麗華さんみたいな美人に大好きなんて言われると、男なんてバカなんだから勘違いしちゃいますよ？はっはっはっはっ」

心の中の悶えなんてものは一切出さず、あたかも流してるかのよう言つてる俺も相当バカだと思う、ああ自覚してるさ。

「気持ち悪いくらい爽やかなオーラを出してて、逆に気持ち悪いぞハッ」と笑つ麗華さん。自分のことを知らなすぎるのも程があるだろう…。

「そんなことより！ささつと始めようぜ、はっなっび！」

軽く飛び跳ねながら言う麗華さん。こういうはしゃいでる姿を見ると年上というよりは妹を持つてる気分になる。

「そうですね、あの真向かいの公園でいいですか？」

「おう！つても…これだけの量、2人じゃ余るかな…」

「結構ありますからねー、誰か呼びますか？あ、でも2人の共通の知人っていないか」

あまつた花火、大量に買い付けたからな。ちゃんと量も考えておくべきだった。

そんなことを考えていると、麗華さんが口を開いた。

「いるじゃん」

「え？」

「コンビ二仲間」

「キレーですねー。寿さんの所」

「……」

「ちょっとお、なんで反応してくれないのさー。あ、これ色変わる！すごいなー」

「あ、ああ……」

「なにー？楽しくないんですかー？折角の花火なのにー」

「……綺麗だなとは思いますよ。ええ、そりゃ花火は綺麗ですよ、夏の風物詩ですよ。と言っても今は秋にかけていますけど。でもそんなちよつと季節が遅れてやるのも中々いいものですよ。ええ、ええ。花火は好きですよ俺も。でもね、なぜ、何故？何故？」
なにゆえ

「そうやって興奮しないのー。もうちよつと落ち着いてー」

「落ち着いていますよ、落ち着いていますとも！でもね？なんで新田さんと2人きりで公園の端っこに縮こまって花火をしなくちゃならないんですかつ」

「しょうがないでしょー。君の『偽』従姉妹が帰って来ないんだからー」

なぜ彼女がいないのか。

なぜ男2人で花火をやっているのか。

まあ簡単なことだ。

麗華さんが言ったバイト仲間とは、俺のバイト先の人たち。要するに、新田さんと春沼さんだった。本当に奇跡的に俺を含め三人とも夜勤ではなかったために、花火大会を開催することになったわけだが春沼さんが少し遅れるということで、夜に女性一人は危ない！と言って迎えに行ったのだ。

麗華さんが。

わかっていて、本当は男の俺が新田さんが行かなきゃとわかっていてのだけれど、「俺が行きますよ」と言葉を言う前に、彼女はもう春沼さんのところへ走って行ってしまったのだ。

まあ駅からこの公園はそこまで遠くないから大丈夫だろう、とい

うことで今虚しくも男2人で花火をしてるのだが……。

「なあに、寿さん。俺と花火がそんなに嫌なんですかー？」

「いやね、君と花火がいやとかではなくて、このシチュエーションが悲しすぎるんだよ」

ひざを抱えながら涙目で花火つて、親が見たらこれ泣くぞ。

「にしても、新田さんが来るとは思ってたませんでした」

「え？なんでー？」

首をかしげながら聞く。普段ゆったりとしているせいか、こういう言動はあまり気にならない。むしろ彼らしい行動だと思う。

「いや、新田さん。こういうの面倒くさいとか言って参加しなさそうないメージあったので」

「うーん、まあ俺必要以上に人と関わるの好きじゃないし、無駄にお金使うのも嫌いだし、正直あのバイトもかなり面倒くさいとか思っちゃってるし、つかそんな人間自体が好きじゃないんだけどー」

まさかこんなネガティブな発言が続くと思わずに苦笑いになる俺。

「でも、メンバーの中にちょっと気になる人がいてねー」

「気になる人？」

新田さんの目線が手元の花火から俺に移ると、心底楽しそうに笑

う。

「うん。」

君の『偽』従姉妹」

涼しい風が、手元の花火をかき消した。

「にしても、ま、まさかあなたが迎えに来てくれるなんて、おおお
お思っていますでした・・・！」

「ああ、期待してるようなやつじゃなくて悪かったな。私、ちよつ
とあんたと話したくてね」

花火大会を開催することになった私とタクナリな訳だが、花火の
量が多いと言うことでタクナリのバイト先にいるニッタと恋する乙
女にも参加してもらうことになった。で、今その恋する乙女と一緒
に駅から公園まで歩いてるわけだけど・・・気のせいか、すげえ
怯えられてる気がする。

「ははははは話！？ですか!？」

「おう、いやぁ別に大したことじゃねえんだけどさ」

「ごめんなさいい!!この前はなんか喧嘩撃っちゃうようなこと言
って、生意気なこといて、ほんつとうにすみませんう!!!」

「あん？何の話だ？」

「本当にごめんなさい!なんかあれはその場のノリというか、ちょ

つと自分のなかで盛り上がっちゃって、後先考えずにやってしまったことであってええええええ！……って、え？」

「なーんのこと言ってるのかよくわかんねえな」

そう言いながらニツツと笑うと乙女も安心した笑みを見せた。

「そっぴや私、あんたの名前知らないんだよね。なんて言うの？」

「あ、私。春沼と……」

「違う違う。私が聞きたいのは下の名前よ下の名前」

「下の名前ですか？ゆうな、です。春沼ゆうな」

「ゆうなかあ。お前本業は召喚士かなんかか？」

「はあ？」

「いや、わかんなければいいや」

本当に分かる人だけでいいや、このネタは。

「そかそか、私は麗華っつーんだ。川北麗華。よろしくな、ゆうなちゃん」

「はい、よろしくですつ。麗華さん」

につこり笑ったゆうなちゃんの顔は、すごく可愛くて女の私でもキュンと来てしまうようなところがあつた。まあ私はそういう趣味

はないけど。

「ところで麗華さん、さっき言ってた話って？」

「ああ……タクナリのことなんだけどさ」

「寿さん？」

「おう、あいつさ。コンビニでどんな感じなの？」

「コンビニって……麗華さんは見たことあるから分かると思うんですけど……」

「ああ、まあな。でも私と出会う前とか、私がない時とか」

「出会う前？今と変わリませんか？」

少し不思議そうな顔をしながらもしつかりと答えてくれる辺り、真面目な人なんだろうなあ、と思う。見た目も男受けしそうな可愛らしい顔だし、性格もよさそうだし。まあちよつと猪みたいになっちまうところがあるみたいだけどさ。こりゃ、モテだろうなあ。いや、今もかな？

「うーん、なんかめっちゃヤンキーだったとか、そういうのないのか？」

「っそんな！寿さんは、優しくて真面目で、他人のことを考えてくれるし、いつも助けてもらってるし、かっこいいし、笑った顔とかがすこし可愛いかったり、失敗するといつも励ましてもらったりして、逆に私は寿さんに対して何も出来てないって言うか寧ろ迷惑か

けてはっかりで……。でもそのことをいったら『気にしすぎだよ』
って笑ってくれて、それがまた可愛くて……。って！私はなななな
なんの話を！……！」

うん、やっぱりこの子は周りが見えなくなっちゃって突き進んじ
やう猪みたいな子だな。

なんだか可愛くなって、笑っていると彼女に怒られてしまった。

「なに笑っているんですか！！」

「いや、ゆうなちゃん可愛いなあと思って。クッククク」

ああ、ああ。赤くなっちゃって。私が男だったら確実に惚れてい
たね、こりゃ。可愛いもんなあ。いじめたくなっちゃうね。

「笑わないで下さいい！……でも、なんでそんなこと聞くんですか
？寿さんがヤンキーかだなんて」

「いや、気にするな。ゆうなちゃんは、タクナリのどんなところが
好きなんだ？」

「どんなところって言ったら、そ、そりゃ全部……って！私、寿さん
のことなんか好きじゃありません！！」

またもや真っ赤になりながら否定するゆうなちゃん。妹を持つと
こんな気分なのかなあなんてぼんやり考えていると、彼女のほうか
ら質問が来た。

「じゃ、じゃあ麗華さんは、今好きな人とかいるんですかっ！？」

「私い？……そうだなあ。もうここ三年くらい、一人の男しか想つてねえよ。不思議なことに、どんなに離れても時間が空いても、違う奴と付き合ってもそいつ以外想えないんだ。未練がましいだろ」

吐き出すようにハツと笑った。

「なんか、すごく意外です」

「だろうっ？私でも意外だもんなあ。でもずっと好きなんだよ。しかも驚いたのがさ、そいつとこの前偶然再会してね」

「それって、もしかして」

「ああ。」

「だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998e/>

コンビニから始まる妙な友情？

2011年5月25日05時30分発行